

百年戦争

文責：勝利王（54期、執筆時高1）

プロローグ ~ Prologue ~

ヨーロッパは日本から遠く離れているため、その歴史は中国史に比べるとあまりよく知られていないように思う。実際、この歴史研究会でもヨーロッパの歴史研究は行われたことがいまだにない。そこでその足がかりとして「百年戦争」を扱うことにした。

百年戦争はイギリス・フランスの関係史における一つの時代観念であり、この言葉が指す1337年から1453年という年代区分は18世紀後半以降に確立されたものである。この語の使用は1861年にフランスで始まったが、イギリスの歴史家達が意識的にこの語を使い始めるのは1870年前後からである。「百年戦争」という時代観念は、この後の英仏両国間の関係の原因となる一つではないかという意見とは他に、この時代区分ももっといくつかの時代区分として分けるべきではないかという意見もまたある。

しかし今回「百年戦争」について知ってもらうため、時代区分がどうということを考えるよりもまず戦争を「研究」ではなく戦争を「紹介」していくことを中心にしたいと思う。



上図：1356年「ポアティエの戦い」（1830年作 油彩画）

～ 序章 ～

“ 長き因縁の始まり ”

～ The beginning of the fatality between two nations ～

イギリスとフランスはドーバー海峡を挟んで隣同士の国だが、今から七百年ほど前この二国の間で百年間にもおよぶ長い戦争があった。これが世で言う「百年戦争」である。

ところで、この二国は突然仲が悪くなって戦争を始めてしまったのだろうか？

じつは、この百年戦争よりも前に二国間ですでに争いがおこっていたのだ。そこで、まず戦争にはいるまでの有名な事柄を紹介していきたいと思う。

～ Section1 ～

“ ノルマン征服 ”

～ Norman Conquest ～

事態はフランスがイギリスに手を出したことから始まった。

イングランド人の王、つまりイギリス国王であった**エドワード**^{さんげおう}**懺悔王**は、王位を継ぐことのできる後継者を得ることができず、そのかわりとなる者として**ノルマンディー公国のウィリアム公**を王国の相続人として指名し、彼のもとに使者を送った。しかし、その後**エドワード**はその使者を、王国の中で最も多くの富・名誉・権力を獲得していた**ハロルド**のもとに送った。それは、ハロルドがウィリアムにイングランドの王冠の相続に関して忠誠を誓うためであった。そしてハロルドはウィリアムに対してこの忠誠を誓った。

しかし、1065年にエドワード王が亡くなると、ハロルドは先ほどの公に誓った忠誠を裏切り王国を支配してしまった。これに対し、ウィリアムはハロルドに使者を送って、そのような狂気の沙汰はやめるよう勧告したが、ハロルドはこれを無視した。こうしてウィリアムはハロルドの支配するイギリスへと攻め入っていくのだった。

その後ウィリアムはハロルドを倒し、1066年、王冠の相続を果たした。それから1154年になるまでノルマンディー家はイギリスを支配した。ノルマンディー家最初のイギリス国王となったウィリアムはウィリアム一世と呼ばれ、ノルマンディー家によるイギリスの征服を行ったことより、「**ウィリアム1世 征服王**」と呼ばれた。

第3章 個人研究（世界史関連）

このノルマン征服は簡単に言ってしまうとエドワード王とウィリアム公が取り交わした約束をハロルドが破って、ウィリアム公が王位継承権を訴えイギリスに攻め込んだ、ということのようだ。



ちなみにエドワード懺悔王の懺悔とは、このエドワードがとても信仰深かったことより名付けられた。

ノルマン征服によって、イギリス人たちは少なくともノルマン人の事を良くは思っていなかっただろう。そしてここからイギリスとフランスの因縁は始まったのだ。

左図：ウィリアム征服王の肖像画

～ Section2 ～

“ ジョン 欠地王 ”

～ John, the Lackland ～

ノルマンディー家による征服の後、イギリスはフランスの諸侯達と親戚となることによって、フランスの領土を徐々に獲得していった。しかし、この時はまだイギリスの国家という概念がなかったため、イギリスの王はフランスの王の諸侯の一人であるといった関係であった。

この節の題名にもなっている「**ジョン 欠地王**」とは英語で欠地王の部分が Lack land となっており、Lack の意味が「欠乏している、不足している」ということから訳されている。この名がつけられたのは、**ジョン王**の父である**ヘンリー2世**がジョンの幼いときにこう言ったからだそうである

「おまえのアニキ達に私の領土をすっかり分けてしまったから、もうおまえにやれる領土がなくなってしまったのだよ。HaHaHa」

セリフはどうかは知らないが、およそこのように冗談交じりで言われたそうだ。

しかし、ジョン王が欠地王と言われるにはもうひとつ理由があるとされている。ジョン王は1199年にイングランド王として戴冠(王位についたということ)。1200年に **ルジニャン家**の城を訪れるのだが、そこでその**ルジニャンのユーグ**

(人名)の婚約者である**イザベラ**と出会った。

(ルジニャン家はこの一族からキプロスと言うところの王家を出している)

ジョン王はユーグに対し、フランスにあるイングランドの領土視察を命じた。この時フランスの西半分はイギリスが支配するようになっていたのだ。これにより、ユーグは予定されていたイザベラとの結婚を延期せざるをえなくなってしまった。そして、ユーグがいないその間に、ジョンはなんとユーグの婚約者であったイザベラと結婚してしまったのだ。

婚約者を奪われ怒り心頭のユーグは、貴族達と手を組み反乱を起こした。その時フランスにおける**プランタジネット朝**¹の勢力をそぎ落とそうとたくらんでいた**フランス国王・フィリップ2世(尊厳王)**は反乱する貴族達の支援をしていた。

そして1202年、この反乱は**イギリスジョン王とフランスフィリップ2世**の戦いへと発展していくのである。しかし、ジョン王はフィリップ2世の知略にはまっぴらごめんほとんど戦わずして、フランスにあったイギリス領土のほとんどを失ってしまった。このことからジョン王はフランスの人たちから「**ジャン・サン・テール**」とからかわれた。これはフランス語で「失地王」という意味である。

イギリス国民もジョン王には愛想が尽き、**フランスの太子ルイ**をイギリスに招き入れるようにして、フランス軍のロンドンへの攻略を許してしまう。

しかし翌年の1216年にジョン王の息子**ヘンリー3世**が即位すると、英国民はヘンリー3世を支持しフランス軍を追い出すのだった。

後者に述べた話が本当だとすれば、ジョン王の~Lackland~という訳し方は「欠地王」と訳すよりも「失地王」と訳す方が正しいだろう。今回は述べられないがジョン王は王としては行政実



左絵：ジョン欠地王の肖像画

務の能力には優れていたようだ。しかし、彼には性格上の欠陥があり、また軍

1 プランタジネット朝はこの時のイギリス王家の名前。ジョン王もこの家柄

事的な才能がとぼしく家臣達の信頼を集められなかった。

以後、イギリスの歴史の中でジョンの名をかたる王は現れることはなかった。

ところで王の名前はその息子であるからと言って必ずしも彼が名前を受け継ぐ訳ではないようだ。例えばジョン王の息子は次のイギリス王になっているが、彼はヘンリー3世と名のっている。他にもヘンリー2世の息子は同じヘンリーでも後ろに「～世」をつけなかったり、と特に名前の付け方は決まっていらないようである。

～ Section3 ～

“ パリ条約 ”

～ Treaty of Paris ～

先に述べたようにイギリスの王はフランスの王の諸侯の一人であるといった関係であった。12世紀いっぱいまでフランスでは**イギリスのアンジュー家**²は**フランスのカペー家**³の封建家臣であったのだ。

しかし、1202年**フランス王フィリップ2世**は宮廷裁判所での判決によってこの封建関係を絶った。つまりこの二家は決裂してしまったのだ。

この間1216年に**イギリス王ヘンリー3世**は即位してから1250年代までに四度にわたってフランス中西部及び西南部に遠征軍を送り、先代ジョン王の時に失ってしまった土地を取り戻そうと企てたが、これといった成果は上がらなかった。それどころか四度の遠征による遠征費の浪費がイギリス諸侯達に重くのしかかってしまった。

当時ヨーロッパではキリスト教徒が聖地エルサレム奪回を目標として、東方へ十字軍と呼ばれる大遠征が行われていた。十字軍は第1回のエルサレム奪回に成功してその後はことごとく失敗。ヨーロッパの封建体制に大きな動揺を与えた。また、十字軍遠征により東方の文化がヨーロッパへと流れこみ大きな影響を与えた。

ヘンリー3世はこの時の**フランス王ルイ9世**にならってこの十字軍への従軍誓願を立てた。このヨーロッパ社会の一大事業を成功させるため、ヘンリー3世は領地回復は一時保留とし、1259年にルイ9世とパリ条約を結んだ。

2 1154年にヘンリー2世がノルマン征服後のイギリスにプランタジネット朝を開いたフランスの名門家。つまりこの時のイギリス王家。

3 987年にフランス公ユーグ・カペーによってフランスのカペー朝が開かれた。この時のフランス王家である。

第1章 “王位継承”

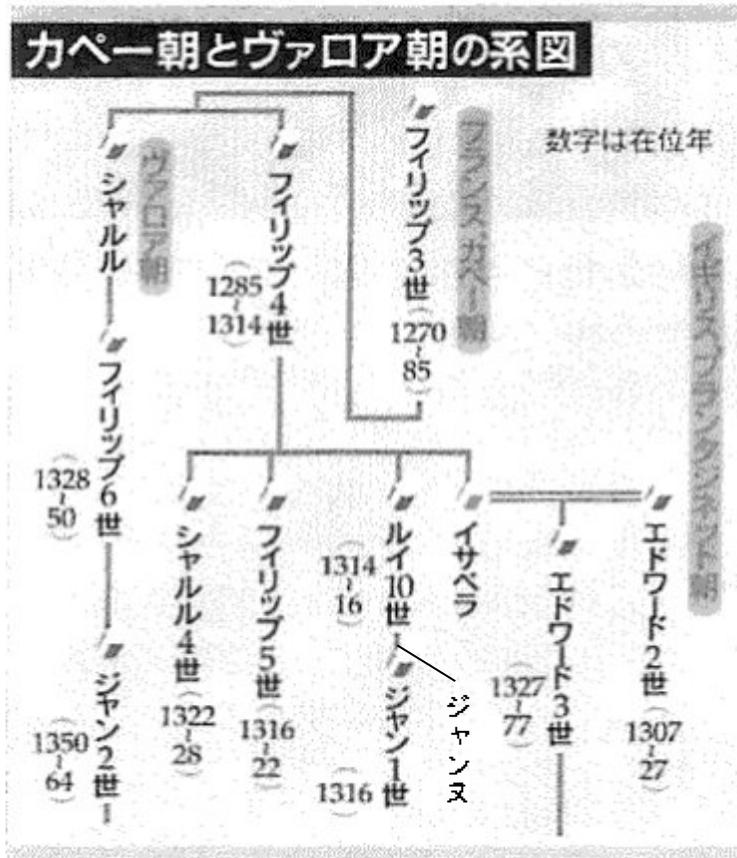
~ Succession to the throne ~

戦争を治めるために行った血統の統合が
より大きな争いを胚胎していたことに
誰が気付いていただろうか…

~ Section1 ~

“ 絶えた血 ”

~ The ceased genealogy ~



まず上の系図を見て欲しい。（多少見にくいかもしれない）

序章のセクション3で1259年にパリ条約を結んだルイ9世の後に王位の付いたのが、上段中心のフィリップ3世である。彼はルイ9世の息子で、十字軍に従軍していた。アフリカにいるとき父ルイ9世が死に、その地で王位についた。

そして、その息子に**フィリップ4世**とシャルル(彼は王位につけなかった)がいた。フィリップ4世は三人の息子と一人の娘をもうけた。ルイとフィリップとシャルルとイザベラの四人である。当時それら三人の息子には王位を継ぐことのできる後継者(息子)がまだいなかった。その上、フィリップ4世は治世最後の年に息子三人の妻を捕らえてしまう。罪状は宮廷騎士と不義密通をしたとのことである。騎士達は身の毛もよだつような残酷な方法で処刑され、三人の妻達のうちルイの妻は土牢で凍死し、シャルルの妻は生きて牢獄を出られなかったという。(もう一人は不明。すいません…)

その後、長男であったルイ10世が王位につき後妻としてハンガリーの王女**クレマン**を迎えるが、ルイ自身は妻が自らの子供を身ごもっている最中に死んでしまった。そしてその後継者として生まれた息子**ジャン1世**も生後五日間で死んでしまう。この時後継者に娘の**ジャンヌ**が残された。(ジャンヌ=ダルクとは違います)

それから次男**フィリップ5世**、三男**シャルル4世**と王位は継がれていく。しかしどちらの王にも後継者は生まれず、1328年シャルル4世は後継者ができなくなついに彼も死んでしまう。

こうして後継者を失ってしまった次の王位を、フィリップ4世の娘イザベラ、その兄ルイ10世の娘ジャンヌ、フィリップ4世の弟でヴァロア伯のシャルルの間で争うこととなった。

そして1328年、シャルルの息子がフランス重臣会議の結果によって、彼はフィリップ6世としてフランス国王に即位するのだ。

本家であるカペー家からではなく、傍家であったヴァロワ家から国王が出たのである。つまりこれは、長きにわたり続いた**カペー朝**が終わり、新しい王朝、**ヴァロア朝**が始まったことも意味していたのだ

~ Section2 ~

“**王の孫**と**王の甥**”

~ The nephew of the King¹ and the grandson of the King ~

ここでもう一度セクション1の系図を見て欲しい。先ほど、**シャルル4世**の死後**イザベラ**、**ジャンヌ**、**シャルル**の三人で争ったと紹介したが、カペー朝は伝統的に男性が王位につくことになっていたのでイザベラ、ジャンヌの二人が王位につく可能性は最初から低かった。このことは**ルイ10世**の息子、ジャン1世が死んだ後、王位が娘(ジャン1世の姉か?)のジャンヌにわたらなかったことからわかるであろう。

第3章 個人研究（世界史関連）

しかし、この場合「女性の王位継承が行われなかった」ということであって、決して「女系の家柄の王位継承権の排除」を示しているのではない。

この時、フィリップ4世の娘イザベラはイギリス・プランタジネット朝の王、**エドワード2世**に嫁いでいる。おそらくこれはモンレイユ条約の際、両国(両家)の関係修復のために行った血統の統合のためであろう。イザベラはエドワード2世との間に、1312年**エドワード3世**をもうけている。

つまり、フランスでシャルル4世の後継者争いが起こっているときにはすでにイザベラの娘、フィリップ4世の孫としてこの世にいたことになる。シャルル4世がなくなったのは1328年であるから、エドワード3世はこの時に16歳になっているはずである。

したがって、王位の継承争いには三人の他にもう一人、エドワード3世がいたことになる。

しかも彼の場合、前王の父フィリップ4世の孫であったことより、甥の関係にあったフィリップ6世よりも外孫であったとはいえ、エドワード3世はフィリップ6世よりもフィリップ4世により近かったことになる。

だが、エドワード3世はその一年前の1327年、イギリスの国王の座に着いているのだ。この上にさらにフランス国王の座に着くということは、フランスそのものがイギリスの領土になってしまうということを示している。

プランタジネット朝の建設者、アンジュー家はフランス南西部にあるアキテーヌ公領の領有権についてカペー家と長い間争っていた。その為、エドワード3世はフランス国王になることでこのアキテーヌ公領をフランス王権から独立させて、自分の主権下に置こうとして、王位の継承権を訴えたのである。

だが、結局このことを危惧したフランスの重臣達は、「フランスで生まれ、なおかつこの地に多くの友人と同盟者を持つ」との理由でエドワード3世ではなく、フィリップ6世を選んだのである。

これはエドワード3世をフランス国王にしないためのこじつけであったに違いない。その事はエドワード3世自身もわかったことであろう。

しかし、エドワード3世はフィリップ6世にこのような内容の手紙を送っている

「わがこのうえなく貴き宗主にして主君よ。私は陛下のなすところ成功を収めざるはなく、また幸運めぐまざるような衷心より念願しております。さて久しい以前から私の義務をはたすべくフランスに赴き、陛下に拝謁をたまわりたいと存じておりましたが、おりあしく私の王国で不測の事態があいつぎ、今日まで胸中しまっておりましたこの計画を実現しえないままに過ごしてまいりました。神のご加護により、事情が許しましたらただちに、義務とこころえております忠誠の誓いを陛下に捧げるべく御許に参る所存です。」

そして、エドワード3世は実際にフィリップ6世に対し、アミアンというところで大陸領の封主として、臣従の誓いを宣する儀式を行ったのだ。

この儀式にはイギリスとフランスによる武力衝突を防ぐという重要な役割をも担っていた。

だが、この誓いは一時的にしか効果を持たず、百年戦争の原因へとつながっていく。

土地の所有に関する臣従関係の儀式が、国王と一般の家臣の間で行われていたのであればまったく問題はないであろう。しかしこれが一国の君主間での事ともなれば、見方によっては国同士の臣従関係を結んだようにも見えないことはないだろう。

もしも、この土地の所有に関する方法が、臣従関係以外で行われていたのなら百年戦争は起こらなかったのかもしれない。

~ Section3 ~

“ フランドル臣 ”

~ He subject Flandre ~

エドワード3世の臣従の誓いによって、イギリスとフランスの緊張関係は一時収まったかのように見えた。だがこれも長くは続かなかった。

イギリスはこの時点でフランスの国土の一部の所有をフランスから認められていた。(パリ条約参照のこと)

しかし、当然イギリスはこの土地をフランス王権から切り離し自らの王権かに置きたいと思っていた。それに対しフランス側は、当時イギリスが征服に苦勞していた**スコットランド**に対して、公然と援助をしていた。

つまり、フランスとイギリスは表面上では武力衝突こそないものの、裏ではいつ戦争が起こってもおかしくない状況となっていたのだ。

このことに**教皇庁**は、二国の緊迫状態を打開するための手だてとして、十字軍遠征を提案する。この計画に両王ともに乗り気であった。しかし、ある時教皇ベネディクトゥスは両国のより一層の融和(仲良くすること)を狙ってもくろんだ小細工によりこの計画は中断する。

すると、二国間の緊張は一気に高まり、状況は英仏の軍事的衝突の方向に走りだした。

フィリップ6世が戴冠してから9年後の1337年、彼はすでにアキテーヌをはじめエドワード(イギリス)のフランス全所領の没収を宣言した。

第3章 個人研究（世界史関連）

それに対抗しエドワード3世はフランス王位継承権を訴え、彼はついにフランスへと攻め込むのである。

エドワード3世はフランス遠征の足がかりとして、イギリスとドーバー海峡を挟んで最も近いフランドル地域の制圧を計画した。（下拡大図参照）



上図：イギリス付近拡大図（序章の図と同じ物・・・）

フランドルは当時ヨーロッパで随一の毛織物の産地であった。エドワード3世はこれを利用してなんとかフランドルを制圧できないかと考えた。

そこで彼はある方法を使ってフランドルに、そしてフランスに大きな打撃を与えた。毛織物を作るためには当然原材料となる羊毛が必要になる。フランドルはこの羊毛をイギリスから輸入して毛織物を作っていた（もちろん他の国からも輸入していただろう）。エドワードはイギリスの国家収入に莫大な損失を覚悟した上で、フランドルへの羊毛の輸出をストップしたのだ。まさに自爆的とも言える行動であっただろう。

だが、これはエドワードの思惑通りフランスに対して大きな打撃を与えることとなった。それどころか、ヨーロッパ随一の毛織物地帯であるフランドルで毛織物が生産できないということは単に経済的打撃を与えるだけでなく、深刻な社会不安を生み出すこととなった。

そのかわりフランドルの側のブラバントには、フランドルへの原材料の再輸出を禁止する条件で、原料の取引を認めた。これによりブラバント周辺の諸侯を加えた反フランス同盟を構築することに成功したのだ。

こうしてフランドルを征服したイギリスはフランスとの長き戦いに突入していくのだった。

第2章

“ 戦禍の中のフランス ”

~ France in the war devastation ~

イギリス軍の上陸を許してしまったフランスは

イギリスへ攻め込むことはなく

ただ戦火の中にさらされるだけだった

~ Section1 ~

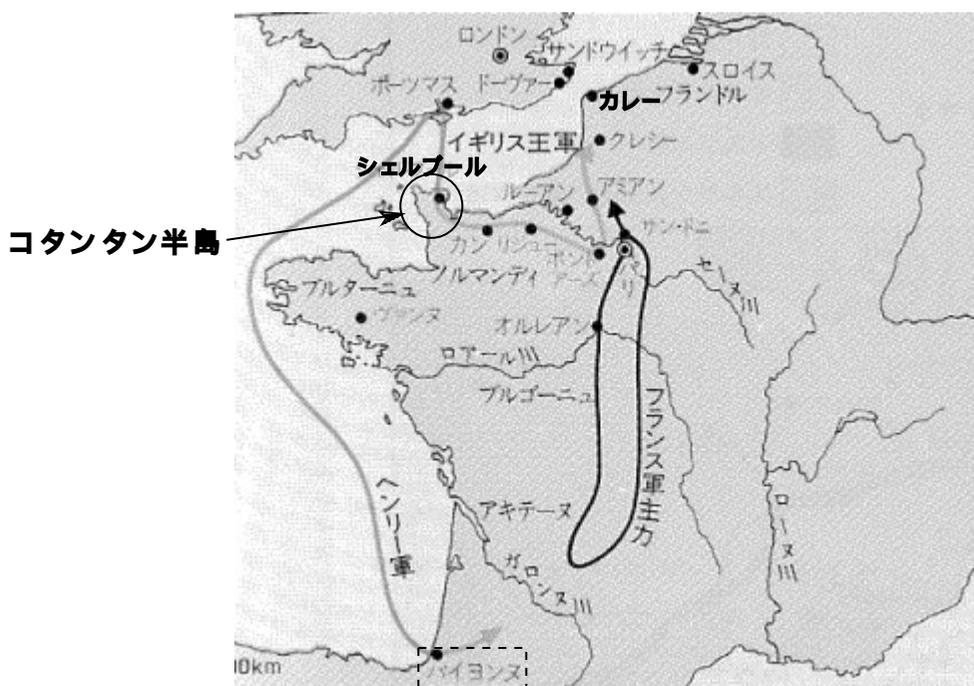
“ クレシーの戦い ”

~ The war of Crecy ~

エドワードは1340年の1月、王位の継承を宣言する。これは、イギリスのフランドル諸都市からの支持に法的な根拠を与え、フランスの貴族層にヴァロア朝への反乱を呼びかけるための物だった。

こうしたイギリスがフランドルを到達したのは、1340年、フランドル北端の港スロイス沖での戦いでフランス艦隊を破った後だった。フランドル制圧と同時に、イギリスは英仏ドーヴァ海峡の制海権を握る。これ以後フランスはイギリスへ上陸しての戦闘をすることはなかった。

それから、イギリスのフランドル上陸後6年後の1346年、イギリスとフランスは百年戦争の中でも大きな戦いをする事となる。



クレシーの戦いにおける英仏両軍の動き：その1

その年の6月、エドワード3世は先発のヘンリー率いる軍隊をバイヨンヌへ上陸させる。その後エドワード自らの軍は7月にノルマンディコタンタン半島のシェルブールから攻め入り、カンを制圧。そして、上の地図のようにセヌ川に沿ってカレーに向かった。フランス王フィリップ6世の軍はエドワードの軍を追って、両軍はクレシーで戦闘となった。(次ページ図参照)

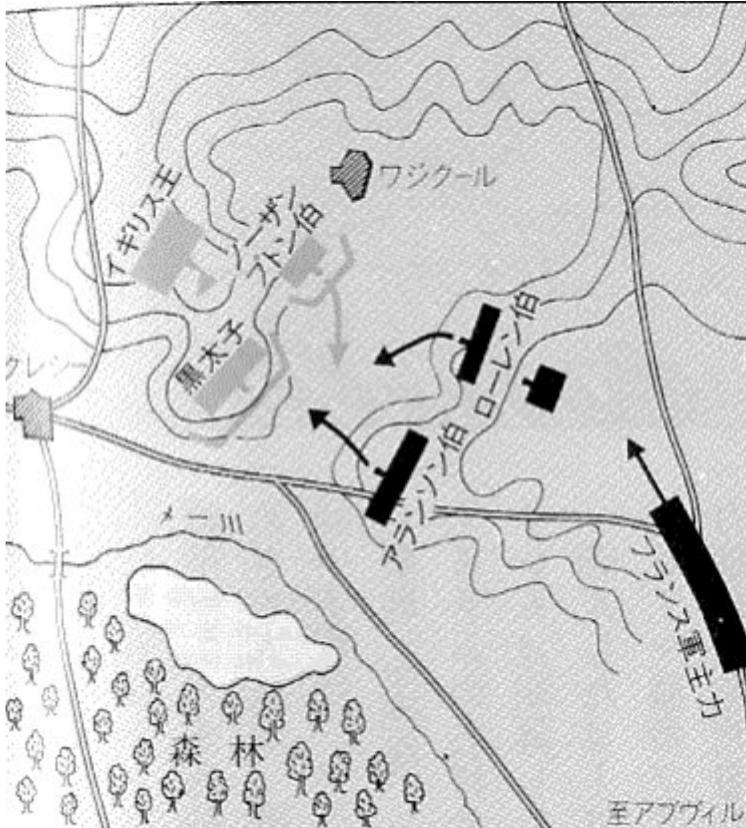
イギリス軍はポンチウ伯の領地であったクレシーでフランス軍を待ち伏せ、丘の上に陣を敷いた。そして前面の狭い谷地に落とし穴を仕掛けた。突撃したフランス軍はその罠とイギリス軍の長弓兵の放つ矢の雨に一時ひるんだものの、なんとかその体勢を立て直し激戦となった。

しかし、フランス軍の先発に向かったアランソン伯軍、ローレン伯軍と主力軍との連絡を絶たれ、フランス軍は全滅。また両伯も戦死した。

こうしてクレシーの戦いで勝利したイギリス軍は、そのまま北上しカレーへと向かった。クレシーの戦いで優位に立ったイギリス側は、11ヶ月の包囲の後翌年1347年の8月にカレーを占領した。

この上で、エドワード3世は同年9月にフランスとの休戦に応じた。

また、フランスはこのクレシーの戦い以前にブルターニュ継承戦争を始めている。スロイスの海戦、ブルターニュ継承戦争と来て今回のクレシーの戦いでフランスはとても大きなダメージを受けることとなった。



クレシーの戦いにおける英仏両軍の動き：その2(クレシー付近の拡大図)

~ Section2 ~

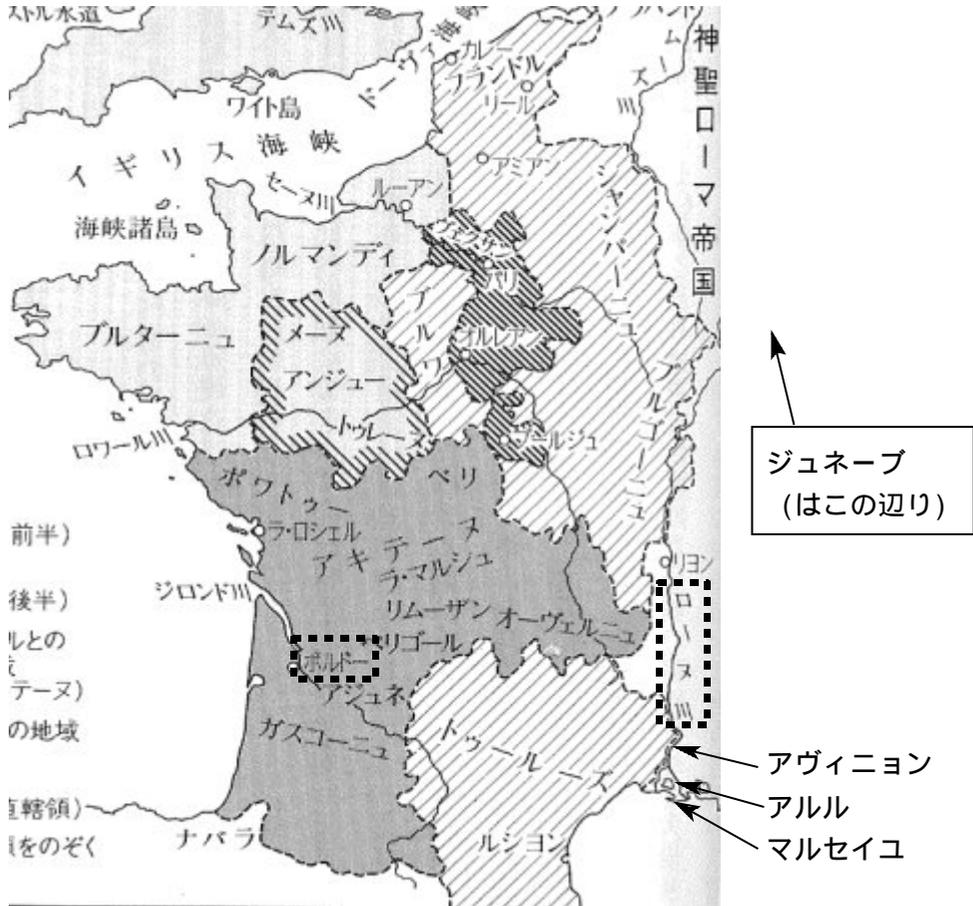
“ 死 ”

~ The Black Death : The plague ~

クレシーの戦いに続いて、敗戦続きのフランスにさらに追い打ちをかけるようにして大きな災害が起きた。人災ではなくあくまで自然災害であった。

1347年の10月、イタリアシチリア島のメッシナに黒い犬の姿を借りて悪魔が現れ、市民の肉体に深い傷を与えたと言われている。黒死病、つまりペストがヨーロッパにもやってきたのである。

始まりはシチリアのメッシナに、黒海沿岸のカッファから出航したジェノバ商人の船団が東方の商品の荷下ろしをしたときに、一緒にペスト菌を持ち込んだとされている。この病気は、感染者の遺体が黒ずむところから黒死病といわれた。感染後は高熱と腫れ物を生じ、黒い斑点が体中にでき数日の上に死に至った。さらに接触によって感染者から健康な人へと次々に感染していった。



フランス周辺拡大図(またまた再利用)

フランスではマルセイユから上陸し、交通路として利用されていたローヌ側に沿ってアルル、アヴィニオンへと1347年中に打撃を与えた。翌年にはスペインとトゥールーズを経由してボルドーに達した。ここから海路で、ノルマンディーやイギリスへもペストの伝染の波は伝えられることとなった。そして同年暮れには感染の波は北フランスへも侵食した。

また、エドワード3世の娘、ジョーンも嫁ぐ時に旅先でアキテーヌで感染、そのまま死亡してしまった。そしてペスト菌は同年8月にイングランド南部のウェイマスに上陸した。

同時代の年代記作者によると人口の3分の1、つまり3人に1人はペストによって死んでしまったと証言している。

当時、ペストについて知られていなかった頃、この大厄災の原因として、様々なものが考えられた。空気の汚染・腐敗、はたまた星座の配置状況などがそうであった。なかでも、ユダヤ人が井戸に毒を投げ込んだためによって起きた、

という風説もあがり、ジュネーブをはじめとした各地の都市でユダヤ人大量虐殺が行われた。

またある者は、ペスト流行の原因は神罰によるものだと考え、神へのあがないとして体中に鞭^{むち}を当て何日もかけて都市から都市へと行進する「鞭打ち苦行」が流行った。

医者達は腫れ物を切開したり、種々の薬を患者に与えたりと試行錯誤が繰り返されたが、どれも効果を上げることなく結局、ヨーロッパの人口は激減し、農村や都市部の社会を大きく変化させることとなったのだ。



上図：当時の鞭打ち苦行の様子



上図：14世紀中期ヨーロッパにおけるペスト感染範囲図

～ Section3 ～

“ポアティエの戦い”

～ The war of Poitiers ～

（今回紹介するポアティエの戦いは高校の教科書などで習う732年のツール・ポアティエの戦いとは違うものなので注意してください。）

イギリスとフランスは、黒死病が流行したことも手伝って、クレシーの戦いから休戦協定を守りこれといった大きな戦いはなかった。しかし、これはイギリス側の侵攻によって破られることとなる。

1354年、エドワード、あだ名をブラックプリンス(黒太子)と呼ばれたエドワード3世の息子のウェールズ大公(いわゆるプリンス・オブ・ウェールズ)が5000人も兵士を率いてギュイエンヌに攻めてきたのだ。彼は黒塗りの甲冑を着用していたことから黒太子のあだ名を付けられていた。

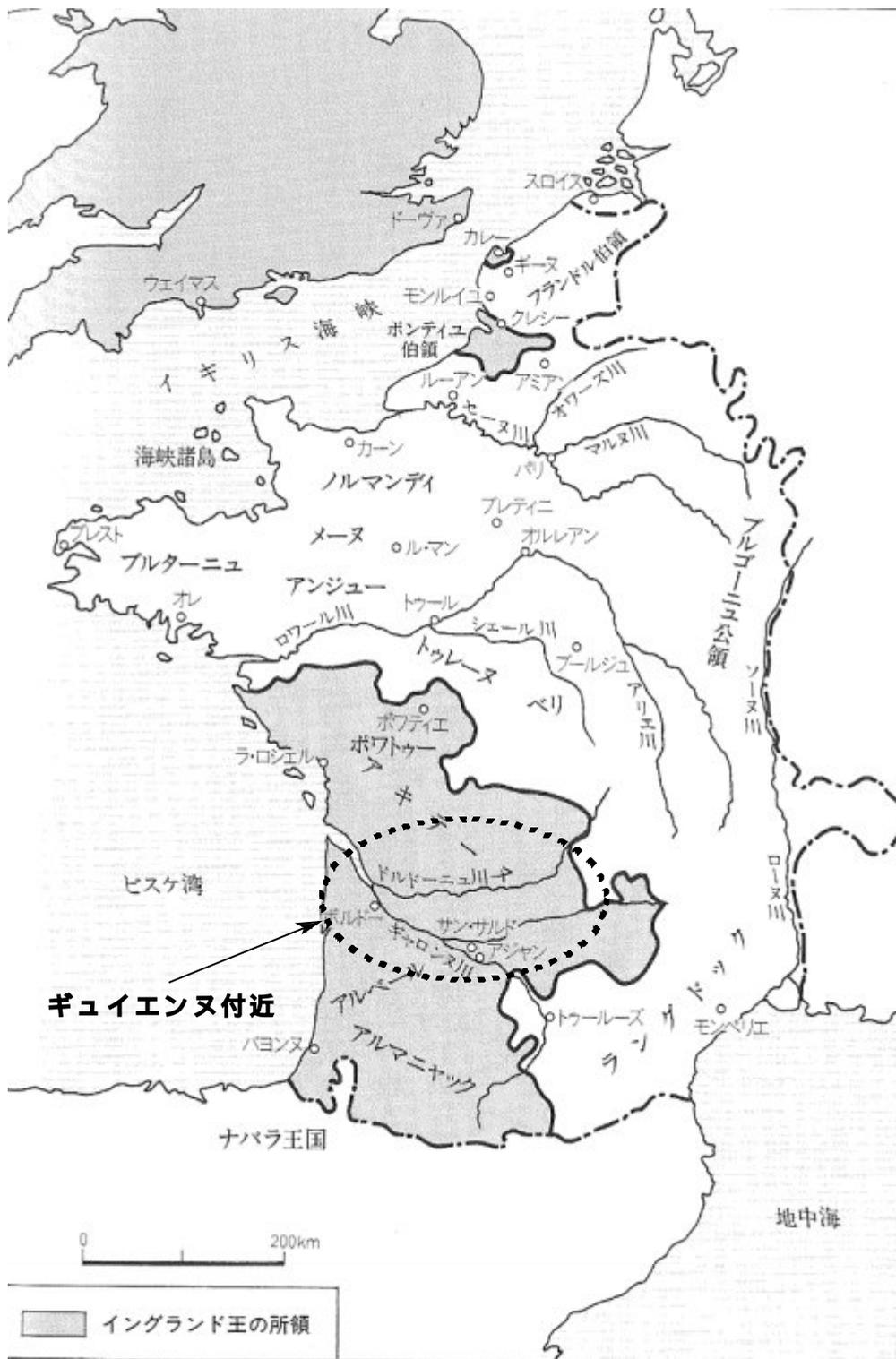
このポアティエの戦いは、フランス軍にとってクレシーの戦いの再現となってしまった。

この戦いでもフランス軍は、イギリス軍の弓兵によって大敗を喫してしまったのだ。

軍を指揮したエドワード黒太子の指揮力が高かったこともあっただろうが、両軍が使っていた弓矢の種類が勝敗を決定的なものとした。フランス側は旧式で速射能力の低く重いジェノヴァ弩を使っていたのに対し、イギリス側はその三倍の速射力を備えた2メートルの長弓を駆使していたのだ。これによってイギリス軍はフランス軍に遠距離から矢の雨を降らせることができた。こうして、イギリス軍はフランス軍に2度目の大勝をあげた。

しかしイギリス軍に再度負けたフランス軍の悪夢はこれで終わらなかった。なんと、多数の貴族とともに当時のフランス国王、ジャン2世がイギリス側に捕らえられてしまったのだ。これに対してフランスは国土の半分をイギリスに割譲してでもジャン王を取り返そうとした。だが、このことは国民意識の高まったフランスの国民が許さず、各地でゲリラ的な抵抗がおこった。エドワードはジャン王引き渡しにある程度妥協する必要があった。なぜならイギリスでも拡大する戦費の獲得に悩んでいたからであったからだ。

こうして1360年、イギリスとフランスは両国の和解として、**ブレティニー・カレー条約**が結ばれた。内容はやはりイギリス側に有利なものであった。フランス側はジャン2世の身代金として300万クラウンを支払うことに加えて、カレー市・ギュイエンヌそしてポワトゥーとその周辺をイギリスに割譲するということに対し、イギリス側はエドワード3世のフランス王位継承権を放棄するということのみであったのだ。(次ページ図参照)



上図：フランス拡大図

第3章 “オルレアン包囲”

～ Siege of Orlean ～

ジャン2世の死後、シャルル5世が王位についた
だが、賢かった彼は病弱で長く王位に
つくことはかなわなかった

～ Section1 ～

“かしこいシャルル”

～ Charles le Sage ～

ポアティエの戦いのブレティニー・カレー条約で、フランスはジャン2世の解放の条件として300万クラウンをイギリスに対して払うことを約束している。その為、一時その身代金を調達するためジャン王は解放された。

しかし彼はうまくその金を集めることができず、約束どおり努力空しくイギリスに帰ることとなり、そのまま彼はイギリスの地で1364年死んでしまう。

王を失ってしまったフランスは次の王として、長く摂政として支配していたジャン2世の長男シャルルが、シャルル5世が選ばれた。だが彼は病弱で、この時両手がすでにほとんど麻痺していて軍隊の指揮にはとても向いていなかったが、この時代の作家の表現によれば、彼はそのハンデにも勝るとも劣らぬ知恵と分別を持っていたという。

彼シャルル5世はフィリップ4世以来の奇跡を行う王として当時の国民に知られていた。このこともシャルル・ル・サージュ、つまり「かしこいシャルル王」と呼ばれる理由の一つであっただろう。

またシャルル王は制度よりも人、と考えた人であった。より賢い人を高官に置いたのである。戦乱とペストで疲弊した国土を再建する為に懸命な判断であったといえよう。このことは軍事面でも同様のことが言えた。

彼の軍事面の右腕として起用されたのはデュ・ゲ克蘭だった。ゲ克蘭は連勝につぐ連勝でノルマンディ地方をイギリス側から奪回し、またブレティニー・カレー条約によって職を失い、野盗化していた傭兵達をやっかい払いするという事など、数々の功績をあげた。これはシャルル5世の人を見る目、かしこいシャルル王の力であろうか？

1368年にイギリスはブレティニー・カレー条約でせつかく手に入れたギユイエンヌをパリの高等法院の審議によって没収されてしまう。これによって再び

2 国間での衝突が起こるのだが、今回はフランスが優位に立った。

こうしてフランス内のイギリスの領地は南にはポルドー・ダクス・ベヨンヌ周辺で、北にはカレーに拠点を残すのみとなった。まさにかしこいシャルル王の手腕によるものだった。

さらにシャルル王はブルターニュ地方とコタンタン半島に勢力圏をのばそうとしていた。だがその為には彼はもっと丈夫な体を持っているべきであったのかもしれない。

1377年にイギリス王エドワード3世とウェールズ太子(黒太子でしょう)が死んでしまう。それにつられるようにして、フランスでも1380年にデュ・ゲ克蘭、そしてシャルル5世がこの世を去ってしまった。

1380年から1400年までの20年間はイギリスでもフランスでも摂政による不安定な政治が続いた。そんな中で、シャルル5世の後を継いだのが息子のシャルル6世であった。

~ Section2 ~

“アザンクールの戦い”

~ The war of Agincourt ~

エドワード3世の死後、イギリスで次の王として選ばれたのはエドワードの孫のリチャード2世が選ばれた。だが、彼は幼少であったために摂政のランカスター公がしばらくリチャードのかわりに実権を掌握し、力をたくわえていた。

リチャードが親政を、つまり自ら政治を始めると彼は農民達に重い税を課した。しかし、その苛斂誅求かれんちゆうきゆうが大きな農民達の反乱を引き起こすこととなる。またこの独裁的な政治が貴族達から反感を買い、リチャード2世の退位を迫った。

こうして1154年から続いていたプランタジネット家のイギリス支配は幕を閉じることとなる。そして、次の王家として名をあげたのがリチャード2世の摂政として力をたくわえていたランカスター家であった。ランカスター公はリチャードの父親のエドワード3世の孫であった。(ランカスター公はリチャードの従兄弟であった)

ランカスター公は自らをヘンリー4世と名乗り1399年に王位につく。その後1413年まで王位に在籍し、息子のヘンリー5世がその後を継いだ。

この頃には久しく混乱していた内政も安定し、イギリス政府にも余裕ができてはじめていた頃であった。そんな時にヘンリー5世はふたたびフランスに目を付けたのであった。

ヘンリーは当時のフランス王シャルル6世の娘、ジャンヌを妻としてむかえ、ノルマンディ、ブルターニュ、フランドルなどの宗主権を訴えた。この手口は百

第3章 個人研究（世界史関連）

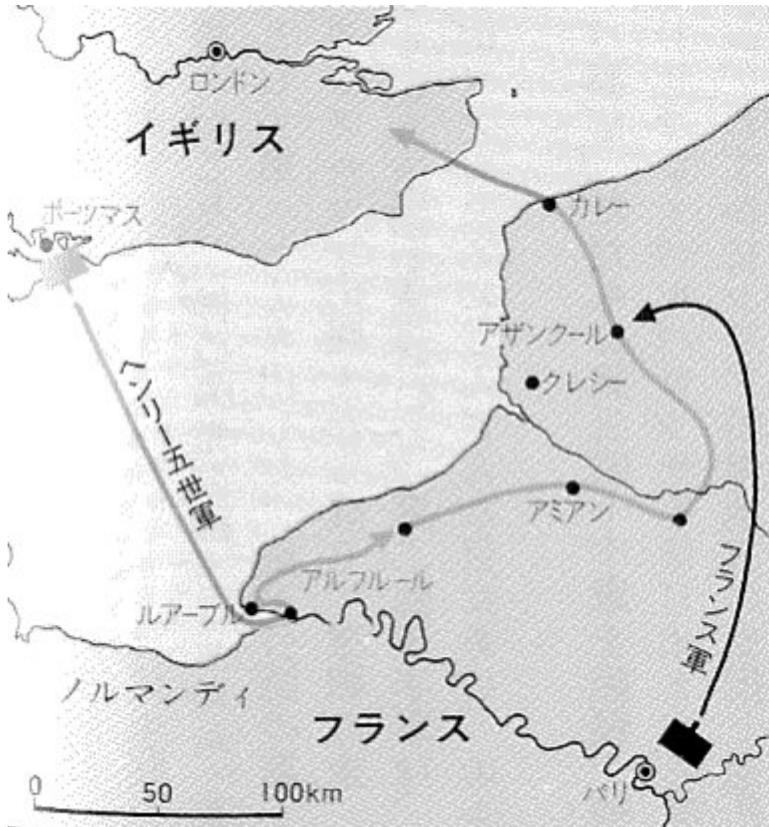
年戦争の始まりとなった、イギリスとフランスに継承権を持つ者がいる、という状況を意図的に作り出していたのではないだろうか。当然フランス側はこれを拒否、ここに戦争開始の黄金方程式が成立、アザンクールの戦いが始まった。

1415年の8月、ヘンリー5世の軍はルアーブル近くに着陸、そのままアルフルールを占領した。その後、北上しアミアンを通過してカレーへと向かった。

このことがパリに伝えられるとすぐにフランス軍も北に向けて進軍。アザンクールの地でイギリス軍と対峙した。

だがフランス勢は一晩中馬に乗りづめで疲労困憊だった。しかも相変わらずフランス勢はイギリス軍に比べ旧式、旧体制の武器、軍隊である上にフランス軍は畑地に布陣をしいたため、おりからの雨でぬかるみに足を取られてしまい、そこをイギリス軍の矢の雨、槍兵によって斬殺された。

こうしてイギリス軍はアザンクールの戦いに置いてフランス軍に勝利を上げることができたが、この勝利は決定的なものとは言えずヘンリー5世の軍は3週間後にはカレーからイギリス本土に帰還した。



上図：アザンクールの戦いで両軍の動き

～ Section3 ～

“ トロア条約の行方 ”

～ Successor of the treaty of Troyes ～

アザンクールの戦いで敗北したフランス国内には大きな政治的波紋が巻き起こっていた。

当時フランスはアルマニャック派とブルゴーニュ派という二大勢力に分裂していた。この二つはいわば与党と野党のようなもので、アルマニャック派が与党であったと考えて良いだろう。先の大戦によって与党は力を失いパリを離れ、かわりにブルゴーニュ派が権力を握ってイギリス王との接近をはかった。

だが1418年にヘンリー5世は再び軍を引き連れ驚くべきスピードでノルマンディ地方を制圧しパリへと迫ると、ブルゴーニュ派の者達はあわててシャルル6世に歩み寄る気配を見せる。ブルゴーニュ派のトップは、ブルゴーニュ公のジャンであったが彼がシャルル6世と歩み寄る前に彼は1419年、アルマニャック派の昔自らが暗殺させた政敵の家臣によって復讐、おそらくは暗殺されてしまったのだろう。

どちらにしろ彼はシャルル6世と調印を結ぶことは出来なかった。この暗殺の裏には王太子シャルル、のちのシャルル7世の了解があったようである。

(ところで、この時のフランスの王はシャルル6世であるが、彼は幼い頃から精神に疾患があったと伝えられており、成人してからそのことがよく表面に現れていたようである。そのせいかフランス国内はシャルル5世のときに比べ荒れていたようである。ちなみに彼シャルル6世は「狂気王」と呼ばれている)

話を元に戻して、ジャン公の息子フィリップ(善良公)は王の暗殺への関与をかぎ取った。

アルマニャック派のトップであった父が死に、実質この派のトップになっていたフィリップは1420年の5月に、イギリス王ヘンリー5世との間に平和を約したトロア条約を結ぶのだ。フィリップはこのトロア条約の中に、シャルル6世の王太子シャルルにフランス王位継承権を認めないということを、ヘンリー5世に認めさせた。こうしてフィリップはシャルルに亡き父の復讐を果たしたのだった。

王位継承権を奪われた王太子シャルルはフランス中部のブルージュに引っ込み、そこで自らが統治する「ブルージュ王国」を創立した。ここにはパリを追われたアルマニャック派があり、実質的にフランス最大の領土を支配していた。

これによってパリのブルゴーニュ派、ブルージュのアルマニャック派、そしてノルマンディを支配していたイギリスランカスター家の三大勢力がフランスの中で三つ巴状態となった。

トロア条約の2年後の1422年、フランス国王シャルル6世は54歳の年齢で死んでしまう。この2ヶ月前にもイギリス国王ヘンリー5世が病死していた。

第3章 個人研究（世界史関連）

しかしこの後、誰も予想しない事態が起こった。なんと当時10ヶ月のヘンリー5世の息子がフランス国王を称し、トロア条約で王位継承権を失いブルジュに引っ込んでいた王太子シャルルがシャルル7世としてフランス王位に即位したのだ。これによってフランスとイギリスの関係はさらに混乱していくのだった。

～ Section4 ～

“ オルレアンの乙女 ”

～ The virgin of Orlean ～

ブルジュでフランス王位についたシャルル7世であったが、彼が正式に王位につくためにはパリの北東にあるランス大寺院で戴冠式を行うのがしきたりだったのだが、彼はそこで戴冠式を行うどころか、イギリス軍の手に落ちたパリから離れなくてはならなかったのだ。

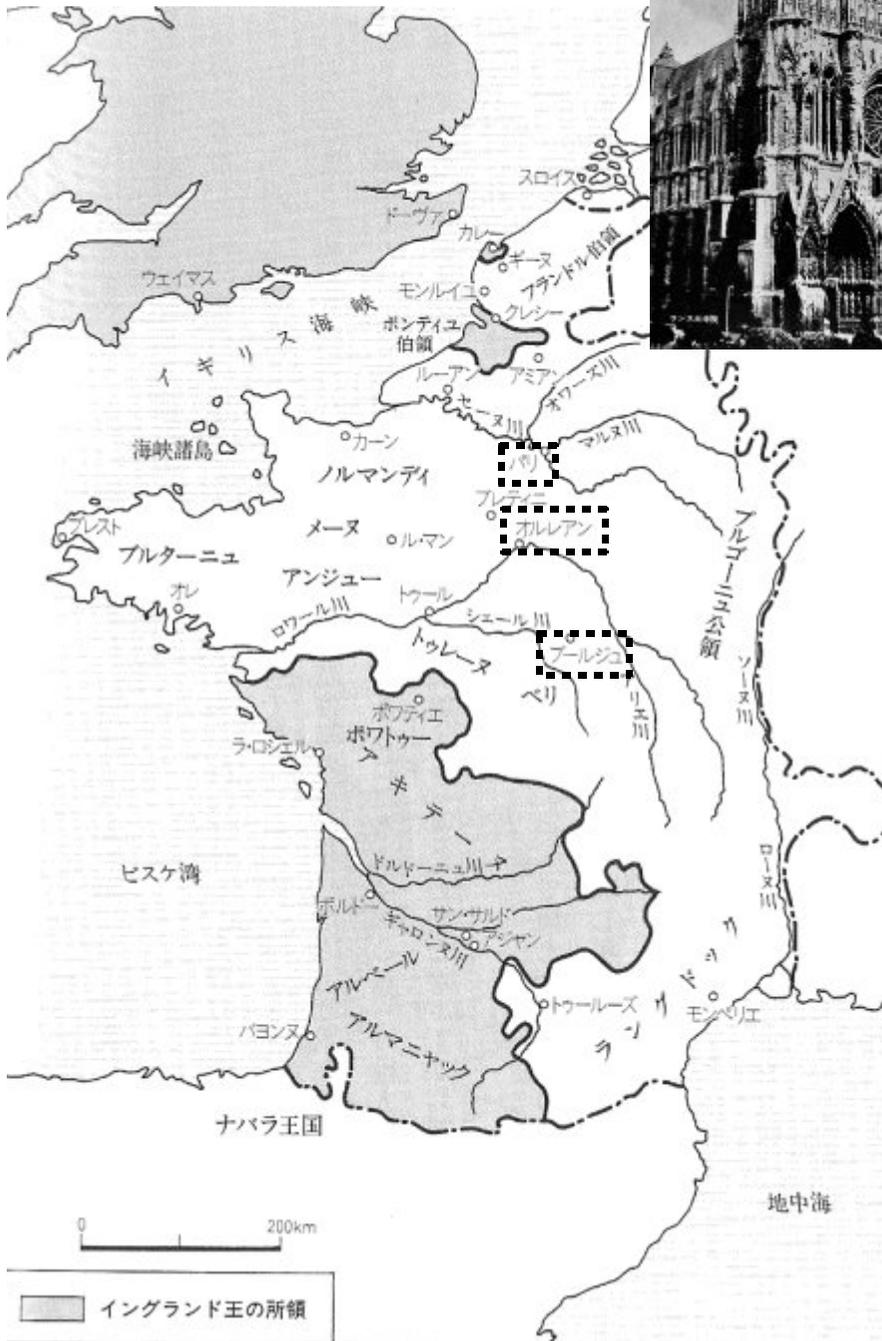
このころイギリスフランス両軍の戦いの中心はパリとブルジュのちょうど中ほどのオルレアンへと移っていた。

オルレアンはフランスを南北に分けていたロワール川のほとりの都市であった。もしも、このオルレアンを守りきれないと南北にいたイギリス軍が合流して、一気にフランス全土を制圧してしまう。その為フランス軍は死力を尽くしてイギリス軍からこの都市を守っていた。だが多勢に無勢、フランス千の兵に対し、攻撃するイギリス兵はざっと数千人である。もはや、オルレアンが陥落、そしてフランス全土がイギリスのものになってしまうのは時間の問題、オルレアンを守っていた人たちの脳裏にもそんな考えがよぎっていた。

しかし、こんなフランスを窮地から救った奇跡の人がいた。

彼女は「オルレアンの乙女」。名を“ジャンヌ・ダルク”といった。

左図：ランス大寺院



第4章 “ジャンヌ・ダルク” ～ Jeanne d'Arc ～

注 この第4章は百年戦争をジャンヌ・ダルクを中心として見ることとなる。当時この戦争は一方的にフランス国内でのみ繰り広げられていたので戦争を見るだけならば、フランスからの視点でも問題はないと思う。

だが、それによって正確な、特にイギリスにおける人物関係がおろそかになってしまう危険性がある。特に今回のジャンヌ・ダルクの章がそうである。この章はあくまでジャンヌ・ダルクの伝記的なものから百年戦争を書いているので、別にジャンヌ・ダルクの事を知りたいならばこの章を読まなくても、近くの図書館や(栄光に入れば豊富な蔵書の中から探すことも可)本屋さんで5千円もあれば立派な本が読めるだろう。

このことをふまえ、第5章の始まりからはジャンヌ・ダルクがフランスを救ったと簡潔に書いたところから始めるつもりだ。これらのことを良く覚えておいて欲しい。

～ Section1 ～

“ 旗 手 ”



上図：ジャンヌ・ダルク

彼女はフランスの東の外れ、ドンレミの地に生まれた。彼女の上には三人の兄弟がいたが、どれも皆男ばかりで彼女が初めての娘であった。農村の娘として生まれた彼女は健康的にたくましく育ち、年の割には大柄な体つきであったという。ジャンヌは全ての家事の手伝いをし、羊の見張り番や牛に畑をすきでずかせる仕事をしていた。

働き者であったジャンヌはとても優しい心の持ち主でもあった。ある日一人の貧乏人がジャンヌの家にやってきたとき、彼女は自らのベッドを彼に譲り暖炉の横の堅いベンチの上で一晩過ごしたとも言われている。

当時彼女はよく村の教会へと通っていた。ある時は十字架の前にひれ伏し、ある時は一心にキリストとマリアの像に向かって祈りを捧げていた姿を人々は

よく見かけていた。その姿を見た彼女と同世代の子供達はよくジャンヌをからかったがジャンヌはそれに対した頬を赤らめるだけだった。

そんな彼女が13歳になったある夏の日の事、父の庭にいたとき彼女はある1つの声を聞いた。それは教会のほうから聞こえてくるものであった。

「正しい行いをしなさい。教会にはよく通いなさい。」

彼女の周りには誰もおらず、そのときはジャンヌはただぞーっとするだけであつた。しかし、その声が2度3度聞こえるうちに彼女は落ち着いてきて、その声をよく聞いた。そしてその声は神から使わされた天使の声だと彼女は確信した。それから彼女は頻りに“神の声”を聞くようになっていた。最初は彼女も戸惑ったものの、そのうちその声を待ち望むようになっていった。そして彼女は自らを未来へと導く重要な御声を聞くこととなる。

「フランスへ行きなさい。おまえはここにとどまっていたはいけない。早く村を離れフランスへ行きなさい。そこでオルレアンの罫を解いてフランスを救いなさい。」

最初はジャンヌもこのことには驚きしり込みしてしまった。なんて言っただけでどんなに頑張っても彼女の生まれは農家の娘。馬に乗ることも、敵と戦うことも知らなかったのだ。

だが、日増しに神の御声は激しいものとなりその内容も鬼気迫っていった。そしてとうとう彼女は村を離れることを決心する。実際にこのような声をジャンヌ自身が聞いたのかどうかはやこの世界の何処にも確かめる術はない。

しかし、彼女は村を出ていくとき村人や友達、それどころか一生のうちでただ一人信頼していた母にさえ知らせることなく出て行ってしまった。これほどの決断をさせる何らかの大きなきっかけがあったことは確かだろう。

村の人々は、そして彼女の両親はジャンヌが出ていったことをひどく悲しんだ。ジャンヌは人々の悲しみを跡にオルレアンへと旅立っていった。

この時彼女はわずか17歳であった。

~ Section2 ~

“ やさしい三つアさま ”

ジャンヌは神から伝えられたお告げ通りヴォークールという所を守っていた軍の守備隊長・ロベール・ド・ボードリクールのもとへ向かった。そこで

第3章 個人研究（世界史関連）

彼女は一度もあったことのないはずのボードリクールをすぐに見分けてしまった。神の御声が彼女を導いたのであった。

ボードリクールと会ったジャンヌは彼に自分がここに来た理由、神のお告げについて話した。しかし、ボードリクールは最初ジャンヌと取り合おうとしなかった。なんていっても目の前にいるのは親の気づかぬうちに村を抜け出したただの17歳の村娘であったのだから。それに当時彼女の言う使命というのはオルレアンを解くこと。当時オルレアンを解くことといえどどんなに有名な将軍達は何人むかっていっても、解くことができなかったのだから、こんな小娘にできるはずがない。ボードリクールはジャンヌのことをとんでもないきちがいだと思った。普通の人間の反応であっただろう。



上図：守備隊長とジャンヌ

だが、ジャンヌが彼に2度3度頼むうちにボードリクールは彼女の熱意に負け彼女に人を与え彼女の望み通り国王の元へむかわせることを決めた。それにその頃にはヴォークルールの人たちもジャンヌに対し大いに信頼を置き、好意も抱いていた。皆ジャンヌのただならぬ使命を深く理解したのだ。もはや誰もジャンヌのことを止めることはできなかった。その後、ブルジュのシノン城にいるシャルル王太子(ブルジュ国王)のジャンヌ達の旅行の許可が出てから、ヴォークルールの地で装備を調べ、シャルル王太子の待つシノン城へと出発したのだった。

当時フランス国内は第3章までに述べたとおり、アルマニャック派、ブルゴーニュ派、そしてイギリスの三大勢力に分かれていた。ジャンヌ達シャルル王太子派はアルマニャック派であったのだが、フランス国内には二つの敵がいたのだ。一行は常に周りに気を配りながらシノンへとむかう必要があった。もし道中ブルゴーニュ派やイギリスの兵士に見つかってしまったら応戦できるほどの戦力を連れていなかったからだ。まさにジ・エンドである。

道中ジャンヌはシャルルへ手紙を送っている。おおよそ内容はジャンヌの使命、そして自らの気持ちを知ってもらうためのものであった。シャルルに興味を持ってもらうため内容はとても興味深いものであったという。

神のお使いの神々しい乙女が数人のお供を連れて凛々しい姿をしてやってくる。オルレアンを解いてフランスを救うために。

ジャンヌの到着を待つシノンやフランス各地の都市にあっというまにそのニュースは広がり、人々を熱狂させた。ジャンヌは、彼女は百年戦争という時代に現れた希望の光であった。

1429年3月6日、ジャンヌ・ダルク一行は敵の陣地の中をかいくぐり、とうとうシャルル王太子の待つシノンへと到達する。シャルルは前にジャンヌが送った手紙を受け取っていたのだが、すぐには彼女と会おうとしなかった。

結局彼女とシャルルの会談が実現したのは、彼女が連れてきた者たちの説得があってからであった。城内にはいることを許され、王のいる居間へ案内されとうとうジャンヌはシャルル王太子の前にたった。一国の王太子と一介の農村の娘との会談がここに実現したのである。

しかし、ジャンヌはせっかく逢えたシャルルに背を向け同席していた貴族達の一人のほうへ行ってしまった。そしてジャンヌはこう言った。

「おやさしい王太子様。わたくしはジャンヌと申す者です。」



これにはシャルルも驚いた。決して背を向けられたからではない。ジャンヌが挨拶したその貴族こそが本物のシャルル本人であったからである。

左図：ジャンヌが貴族達の中から本物のシャルル王太子を見つけた様子

実は前に送っていた手紙の中でジャンヌ自身がそうするように指示していたのだ。そして本当に当ててしまった。ジャンヌの噂は本当であった。シャルルはそう思っただろう。

これによってジャンヌはシャルルを信頼させることができた。このままオルレアンへ・・・となるはずであったが、重臣達がまだジャンヌのことを完全に信頼できていなかったのである。そこで重臣達は本当にジャンヌが神の使いなのか、はたまたキリスト教の異端の女なのかということを確認するべく彼女を取り調べることにした。

取り調べには当時の有名な高僧達が集められ、重々しくそして厳しく行われたが、ジャンヌはそれにも堂々とハキハキした答えを返し、高僧達を納得させ

た。彼女は少しも悪いところはないと認められたのだ。
あとはオルレアンへ行って自らの印を表すだけであった。

～ Section3 ～ “ 乙、オルレアンへ ”

ジャンヌはシノン城からトゥールへ行き、そこで後のジャンヌを象徴する装備であった白い甲冑、白いかぶと、そして軍旗を手に入れた。他にも彼女は剣も持っていたがジャンヌは血を流すのが嫌いであった。その為実際に武器として使ったのがこの軍旗であった。

この軍旗には表側には神が世界を支えて雲の上に立ちその足下にユリの花を持った二人の天使が神をたたえている図が、そして裏には紺碧の楕型の紋章を二人の天使が支えていて、その楕の上には金のハトがとまり、そのくちばしには「天国の王によりて」と書かれた吹き流しが書かれたジャンヌの紋章があった。この軍旗は彼女の誇りであり、そして証でもあったのかもしれない。

こうして全ての準備は整った。ジャンヌ一行はオルレアンへとむけ進軍を始めた。

そのころオルレアンを攻撃するイギリス軍では十二分に人を配置することができないくらいの人手不足に陥っていた。兵糧や武器の配給がうまくいわずに病気になる者や逃げ出す者が続出したのだ。これに加えイギリス軍はオルレアンへ通じる道や、ロアール川を完全に支配できなくなっていた。これはオルレアンを守る人たちへの食料や武器の運搬が可能であるということも表していた。

これだけでも相当の痛手なのにさらに悪い知らせがあった。イギリス側の砦の内の一つがフランス軍によって落とされてしまったのだ。これによってイギリス軍はフランス軍のオルレアン解放のきっかけを与えてしまったのである。

フランス軍にとって後はそこを拠点にしてイギリス軍を蹴散らせばよかった。だが、度重なる敗戦によってフランス軍にはいまいち自信がなかった。それでイギリス軍との対戦に持ち込めなかったのだ。イギリス軍以上に自分の心の中の不安がイギリス軍にとっての最大の敵であったといえよう。この敵をうち破ることができるのはジャンヌのみであった。

ジャンヌの一行はロアール川に沿ってオルレアンへとむかった。ジャンヌはロアール川の北側を歩いてオルレアンへむかうつもりであったが実際は南側を歩いていた。これはイギリス軍からの攻撃を避けるための將軍達の作戦であった。

実はこの軍勢の作戦をたてていたのは数人の將軍達であってジャンヌではなかった。ジャンヌは軍の志気を高める、いわば応援団団長のような役割をしていた。

彼女がその事に気がつかなかったのは將軍達が教えなかったことに加え、彼女が地理にうとかったからとも言われている。だがある時北側を歩いていると前へ

進めなくなってしまった。この時ジャンヌは初めて北側を通っていないことに気がついた。なぜなら北側を通るといことは神によって教えられた物だったからだ。彼女が北側を通るように指示するとすぐに進めるようになったという。

こうして食料や武器は無事オルレアン城内へ運び込むことができた。だが、ジャンヌ達国王軍は城内にはいるわけにはいかなかった。なぜならそんなことをすればイギリス軍がたちまち攻めてきて大混乱を招いてしまうからである。

将軍達はせめてジャンヌだけは城内にはいるよう勧めたが、ジャンヌはここで自分だけ入ってしまうと軍隊の志気が下がると考え反対した。だが、将軍達の強い説得によりジャンヌはついにオルレアン城内へと入るのだった。

～ Section4 ～

“ 乙女、門へ ”

オルレアンへ入場するやいなやジャンヌは熱烈な歓迎を受けた。男も女も子供も老人もみんなジャンヌの到着を待ちわびていたのだ。彼女は希望に満ちた感嘆の声をききながら宿舎へとむかったがあまりのたくさんの人々によってなかなかたどり着くことができなかった。

宿舎で一夜を過ごした彼女は、一日目は戦わないとオルレアン市防衛司令官のデュノアから知らされた。一刻も早くオルレアンを解放したかったジャンヌにとってはとても不本意であったが仕方なかった。そこでイギリス兵に早く降参して立ち去るように勧めた。イギリス軍にとってジャンヌは魔法使いの女にしか見えなかったため嘲笑っていた。



そのうちに国王軍もオルレアン城内へと入り本格的にイギリス軍との戦いが始まる。国王軍の到着後すぐにイギリス軍への攻撃は開始された。

まず、フランス軍が兵糧を運ぶために非常に邪魔であったサン・ルー砦を落とした。この戦いでもフランス側にもイギリス側にも150人ほどの負傷者は出たものの、フランスはイギリス側に大きな穴を開けることができたのだ。

左図：ジャンヌのオルレアン入城

第3章 個人研究（世界史関連）

その後、ジャンヌ・ダルク率いる国王軍はオルレアンを囲むようにしてたてられていたイギリス軍の砦を次々と撃破していくのだった。

そして1429年、イギリス軍はフランス軍によって蹴散らされ、ついにオルレアンは完全に解放された。これはイギリス軍によって包囲されてから209日ぶりのことであった。しかしこれは、ジャンヌが来てからたったの10日後のことであった。

～ Section5 ～

“ フランスのシャルル七世 ”

オルレアン解放後のジャンヌに残された仕事はもう一つあった。それはシャルル王太子を正式なフランス国王にすることであった。その為にはランスにあるランス大聖堂で伝統的な儀式に乗っ取った戴冠式たいかんしきを行う必要があった。

当時、フランス軍が次に行くこととして2つの意見が上げられていた。一つはパリである。首都のパリには、フランス国王を名乗るイギリス人がいるのだ。そこへ攻め入っていくか。もう一つはイギリス領のノルマンディー地方へ攻め入り、そこで何とか頑張っている少数の貴族達と協力してノルマンディーを攻め落とすことであった。

そんな中で、ジャンヌのランスでの戴冠式という意見は前の二つにも劣らないほど、危険な物であった。

重臣達は悩んだ。今どれを行うのが有用か誰も解らなかった。そのためにはっきりした態度を見せなかった。その上重臣達の中にはジャンヌの活躍をねたむ者までいた。国王の侍従長のラ・トレモイユがそのいい例であった。

彼はジャンヌの計画がうまくいかないように邪魔をした。いまこそお互い協力し合ってフランスに留まるイギリス軍と戦わなくてはならない時なののである。

だが、トレモイユの計画にもジャンヌは負けなかった。彼女の意見をシャルルが採用してランス奪回を決定したのだ。この時にシャルルとともに逃げてきたランスの大司教も強く賛成したことも大きく影響した。

こうしてオルレアンの東南60キロほどの所にあるジアンに国王軍3000人が集められた。その時のシャルルにしてみればこれだけの数を集めるのがやっとであった。

ランスまでの道のりは冗談ではなく本当に敵の領地の真ん中を歩いていく必要があった。当然相手も普段なら敵が通るのを黙って見送ったりはしないだろう。だが、道程ではトロアにおいて1回小競り合いがあっただけで、後は何事もなく進んだ。

ジアンを出て20日後、まさに稲妻のような勢いでジャンヌ達一行はランスの

地へたどり着いたのである。この速さは何もない時に軍隊行進をやっているくらいの速さであった。戦争中においてこのようなことが起きるのはまさに奇跡といえよう。

1429年7月17日、ランス大聖堂にてシャルル7世の戴冠式がとりおこなわれた。この儀式には本来ならパリの北東にあるサン・ドニ修道院にある笏しやくと宝珠ほうしゆを戴冠式の後に赴くのがしきたりであった。ここに眠る先代フランス国王の墓に自らの即位を報告するのである。だが、この時その修道院は敵の手に落ちてしまっていたため行くことは不可能であった。

だが、それを抜きにしてもこの戴冠式が行えたことは非常に大きな意味を持っていた。

第一に、この戴冠式を行うことによって国王のみに与えられる、教会に認められた神聖かつ超越的な権威が与えられる。だからこれをしなければどんなに力のある貴族がいたとしても、国王になることはできない。シャルルが正式な国王の儀式を行ったことによって、貴族達に自らの権威をアピールすることができる。

第二に、現在首都パリにいるイギリス人のフランス国王を、偽物だと断言できることである。シャルル7世は偽フランス国王とやっと同じラインに立って戦えることとなる。



ジャンヌもシャルル7世の戴冠式に参列していた。片手にしっかりと軍旗を掲げて。

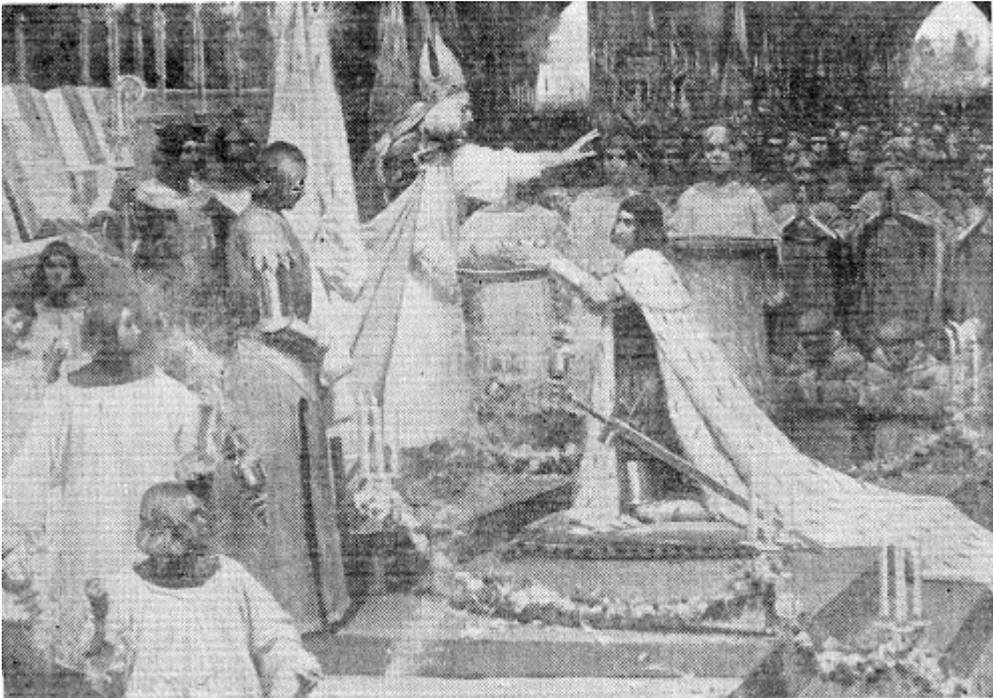
本当は彼女には参列する資格はなかった。だが、フランス国王シャルル7世を誕生させた最大の立て役者は誰だったか。オルレアンを解放するのに最も貢献したのは誰か。彼女こそこのフランスを代表するにふさわしいのではないか。そう配慮してのことだった。

左図：戴冠式でのジャンヌ

～ Section6 ～

“ とらわれのジャンヌ・ダルク ”

ジャンヌは神からオルレアンを解放すること、そしてシャルル7世を正式な王にすることが使命として受け取っていた。だから、シャルル7世が戴冠式を行った今、彼女の役目は全て果たされたこととなった。



上図：ランス大聖堂で戴冠式をするシャルル7世

だが、彼女はドンレミの村には戻らないで国王の軍隊にとどまった。彼女には、まだやりたいことがあった。それは、パリへの進軍であった。

シャルル7世が正式なフランス国王となった今、首都であるパリにイギリス人の国王など必要ない。それに正式な王になったことによって国王の権威が一気に高まったのだ。国王軍が赴けば、敵側に属していた都市はすぐに降伏、開城した。

この機会を逃すことはない。ジャンヌはそう思った。だが、今回もやはり重臣達は躊躇した。今は明らかにフランス軍有利であるにもかかわらず、自信のなさが踏みとどまらせた。またこの陰にはあのラ・トレモイユの嫉妬も働いていた。

こうして時間がいたずらに過ぎていった。まるでフランスがイギリスの為に回復するのを待ってあげているみたいではないか。一刻も早い決断が要求された。

そしてついに、ジャンヌの希望が受け入れられた。だがこの時ランスでの戴冠式からすでに40日も経過していた。

パリ攻撃の際は、大砲を使わずにはしごで城壁を登るというジャンヌの計画が用いられた。が、この計画は見事に失敗。彼女自身も足に矢を受けるというケガを負ってしまった。ケガにもめげずもう一度パリ攻撃を希望するも、彼女の考えはもう聞き入れられなかった。ジャンヌはパリ入城をあきらめざるをえなかった。

その後国王軍はブルゴーニュ軍を攻撃する。この時、序盤は国王軍有利でこ

とが進んでいた。あっという間に敵のグループの一つを撃破してしまった。だが、国王軍兵は必要以上に深追いしてしまった。敵の村を調子にのって荒らし回っている間に他のグループが救援として駆けつけてしまったのだ。救援の到着によって形勢は逆転、ブルゴーニュ側の優勢となってしまった。これに驚いた国王軍はその場を退却し、一度拠点としている城内へ戻ることにした。そして敵兵の侵入を防ぐために城門は固く閉ざされてしまった。

この時ジャンヌはどうしたのだろうか。彼女はまだ城の外で戦っていた。逃げ遅れた仲間の兵達の退却を援護していたのだ。彼女は必死に戦った。

だが、気がつくときジャンヌは周りを囲まれてしまっていた。もう遅かった。



上図：捕らえられるジャンヌ

ジャンヌ・ダルクはとうとうブルゴーニュ派の兵によって捕まってしまった。

シャルル7世も重臣達もそしてフランス国民もこのことには耳を疑った。そしてジャンヌが解放されるように必死に祈った。しかしその祈りも空しくジャンヌはブルゴーニュ派から敵国イギリスへ金貨一万枚で引き渡されてしまうのだった。

～ Section7 ～

“ 聖 主 旦 ”

イギリスに引き渡されたジャンヌは教会の裁判を受けることとなった。負け続けのフランスが突然勝つようになったのはこの女が魔女だったからに違いない。そう思って疑わなかったイギリスは、ジャンヌをキリスト教の道を踏み外した者と見なしたのだ。

当時の教会裁判は現在の裁判と大きく違った。まず、確かな証拠がなかったとしても教会は噂のみによって人を容疑者として捕らえることができた。また、教会は容疑の証人を連れてきて話させたのだが、被告に対して証言者を明かさなかったし、時には証言内容すら教えないこともあった。そのうえ弁護人をつけることすら許されなかったのだからどんなにキリスト教を信じていても、無実であってもこのような裁判でははっきり示すことはできない。教会による異端糾問裁判は教会側にとって都合のよいように行われていた。

第3章 個人研究（世界史関連）

当然ジャンヌもその例外ではなかった。彼女の場合、イギリスの敵と呼ばれても仕方ないほどの人であったからその裁判はより厳しく行われたことであろう。だが彼女は正式な裁判の前の取り調べの時もいつもハキハキして少しも迷ったりせずに誠実に答えていった。だが、イギリスから見れば、このような状況でこんなに落ち着いていられるのはこの女がやはり魔女だからだ、そう思った。

こうした中で行われた裁判での判決は、やはりジャンヌは恐ろしい魔女として有罪、であった。



上図：教会裁判でのジャンヌ(中央)

だが、教会はまだ彼女を殺すことはできなかった。なぜなら、当時魔法使いと認められた者を殺す方法として主流であったのが火あぶりであったが、この火あぶりをを行うためには、判決を受けた者が2回以上魔法使いであると判決を受けた場合のみであった。

ジャンヌはまだ一回裁判を受けただけであったから火あぶりにかけられることはなかった。

しかし、ジャンヌほどの人間でも自分が火あぶりにかけられるのは怖かった。第一回の裁判が終わった後の判決を言い渡される際、ジャンヌは自らがキリスト教の異端であり、それを悔い改めるといふ誓約書にサインをしてしまう。この時彼女は自分がどの様な状況におかれ、何をしているのかも解らないほど混乱していた。

だがサインした後、ジャンヌは自らが大きな過ちをしたことに気がつく。自分が異端であると認めたということは、これまでフランスを救うために聞いてきた神の御声、そして神の存在を否定してしまった。神様を裏切ってしまった。

判決を受けたとき混乱していたジャンヌも、落ち着きを取り戻していた。そしてあの誓約書は嘘だったと宣言してしまった。これは教会側の思うつぼであった。これでもう一度裁判をすればこのジャンヌに魔女の判決を言い渡すことができる。そうすれば二回裁判を受けて、二回魔女の判決を受けたジャンヌを火あぶりにかけることができる。そういうことだった。

こうして迎えた第二回の裁判。彼女は再度魔女としての判決を受けてしまった。彼女の言い渡された刑は、火あぶりの刑であった。

～ Section8 ～

“コ、ロ、ニ”

1431年5月30日、ジャンヌが火あぶりにかけられる日がやってきてしまった。

刑場にジャンヌを連れて行く使者がやってきたとき、彼女は自らを嘆いた。そして9時、彼女は周りを兵士に守られながら小さな車に乗せられ刑場へとむかった。刑場はルーアンにあった。

火あぶりにかける際の決まり文句を聞いた後、ジャンヌはとうとう火あぶりにかけられる。自らが異端であると書かれた紙の帽子をかぶせられ、ジャンヌの罪が16も書き連ねられた板がはられた柱にくくりつけられた。柱の下には薪たきぎが積み重ねられていた。ジャンヌは十字架を抱きしめながら涙を流した。

そして運命の瞬間がやってきた。兵士によってつけられた火は瞬く間に広がっていき、ジャンヌを燃えつくそうとジャンヌの体をなでまわした。火による煙が彼女の目、鼻、口をふさいだ。そんな中、彼女は命ある限りときれときれに叫んだ。



上図：ジャンヌが火あぶりにかけられた刑場跡

「神の御声はわたくしをだましてはいなかった！わたくしのしたことは神様のお言いつけによるものだった。聖ミカエル様！聖カトリヌ様！聖マルグリート様！」

「イエス！」

こうして世界はこの聖なる乙女を失ってしまった。ジャンヌはまだ19歳であった。彼女の死後25年後の1456年、ジャンヌ・ダルクに対する裁判がやり直される前の判決は全て誤りだったとされている。

瀕死の状態にあったフランスを救ったジャンヌ・ダルク
彼女をたたえて15世紀のフランスの詩人アラン・シャルティエがこううたった

彼女はおさえた、野蛮なイギリスを
彼女はとめた、フランスの災いと火を
おお、すばらしい乙女よ
おまえはふさわしい
どんな栄光にも
どんなたたえにも
どんな神の名誉にも

第5章

“されど時代は流れゆく”

~ Therefore, History is going on ~

ジャンヌ・ダルクの活躍によってフランスは志気を高め、自らの領土を取り返していった。

そんな時のイギリス軍によるジャンヌ処刑のニュースはフランス国民にとってあまりに衝撃的なニュースだった。国民は悲しみに暮れ、激しい怒りを覚え、皮肉なことにより一層の団結力が生まれたのであった。

自分たちはアルマニャック派とは違う、と思っていたブルゴーニュ派の人々もジャンヌの死によって両者は同じフランス語を話す同じ人間なのだ、と感じるようになっていた。

このことから1435年にアラスの地で開かれたアルマニャック派とブルゴーニュ派の完全な和約が結ばれたことは当然の流れであっただろう。ブルゴーニュ派の諸侯達が王(シャルル7世)に屈服し、団結しあったことによりフランス国王派の敵はイギリス軍ただ一つとなった。

アザンクールの戦い以来分かれていたフランス国土がまた一つとなった。死んでからも人々を動かすことのできた、オルレアンの乙女ジャンヌ・ダルクはやはり偉大な人であった。

アラスの和約の後、国王が首都パリに戻ってまた一つとなったフランスはイギリス軍との最終決戦へと突入する。ブルゴーニュと言う共通の敵を持つ仲間を失ったイギリス軍の敗北はもうこの時目に見えていた。

今までの戦いを教訓にして伝統的な騎士戦法からイギリス軍のような弓兵隊を中心とする編成にして意気の高まったフランス軍は、1450年のフォルミニエーの戦いにおいて勝利する。

同年にノルマンディー地方をフランス側に取り返すと、この戦争の全てが始まった因縁の地、アキテーヌを取り返すためフランス軍は最後の作戦に乗り出す。

そして1453年、フランス・イギリス両軍はボルドー近郊のカスティヨンの地で対峙する。この戦いでイギリス軍の指揮をとったのはシュロウズベリ伯であった。彼はイギリス軍に防戦の式を出していた。しかしフランス軍の大砲の弾により自らの馬が倒れ戦死する。こうして指揮官を失ってしまったイギリス軍の統率はバラバラとなり、イギリス側はフランス・カレーを残しフランスから全面撤退をする。この後イギリス王ヘンリー6世はしばらくの間「フランス王及びイギリス王」と名のっていたらしいが、この戦争の敗北によってイギリスは政情不安となってしまうのであった。

こうして、1066年のノルマンコンクエスト以来のイギリスフランス両国の長き戦いは1453年のカスティヨンの戦いでフランス側の勝利という形で終焉を迎えることとなったのだ。イギリス王との百年にもおよぶ長き戦争を終わらせたフランスであったが、まだ平和になっただけではなかった。いまだにフランス国王の権力基盤もしっかりとしておらず、勝利国フランスにも戦争によって残された問題はまだまだ山積みの状態であった。

(終)



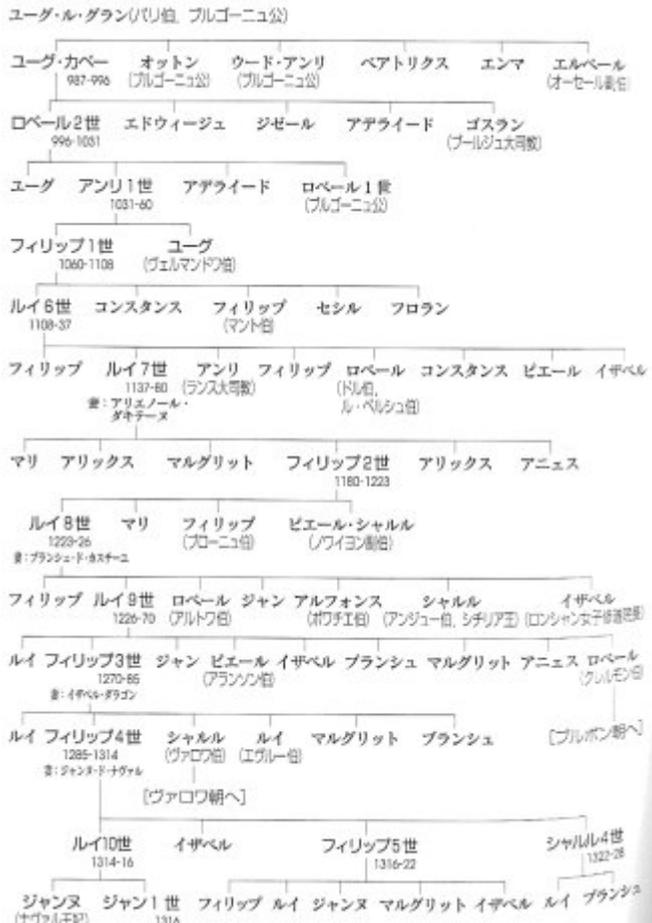
左図：ジャン・フーケによる
シャルル7世の肖像画

第6章 “読む際の参考資料”

この章では第1章から第5章までの用語や地名などが解りやすくなるための資料を数点載せておくことにする。ここの資料と照らし合わせながら私のつたない文章を読んでいただくと嬉しい。

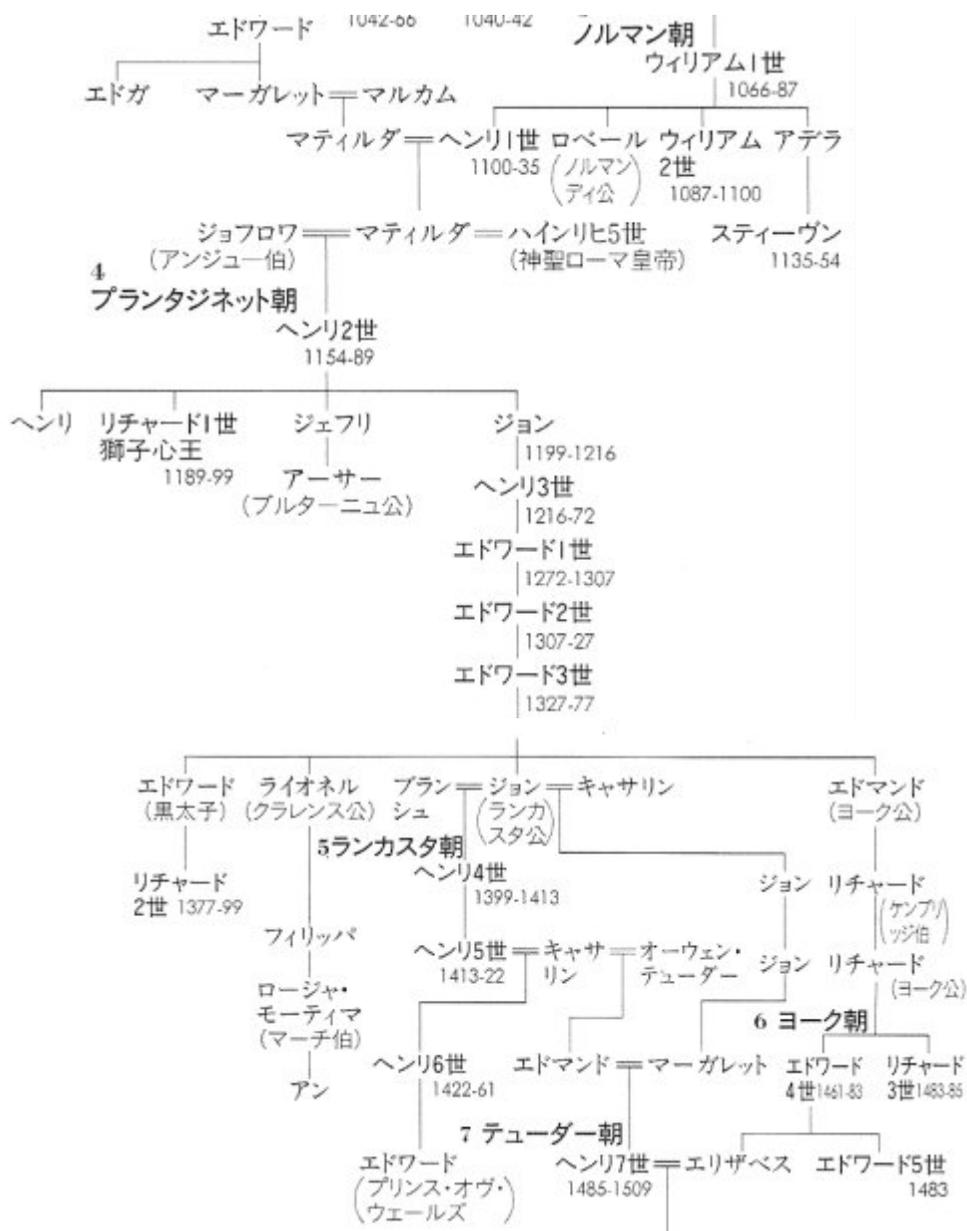
1. フランス王家系図

右図：カペー朝系図

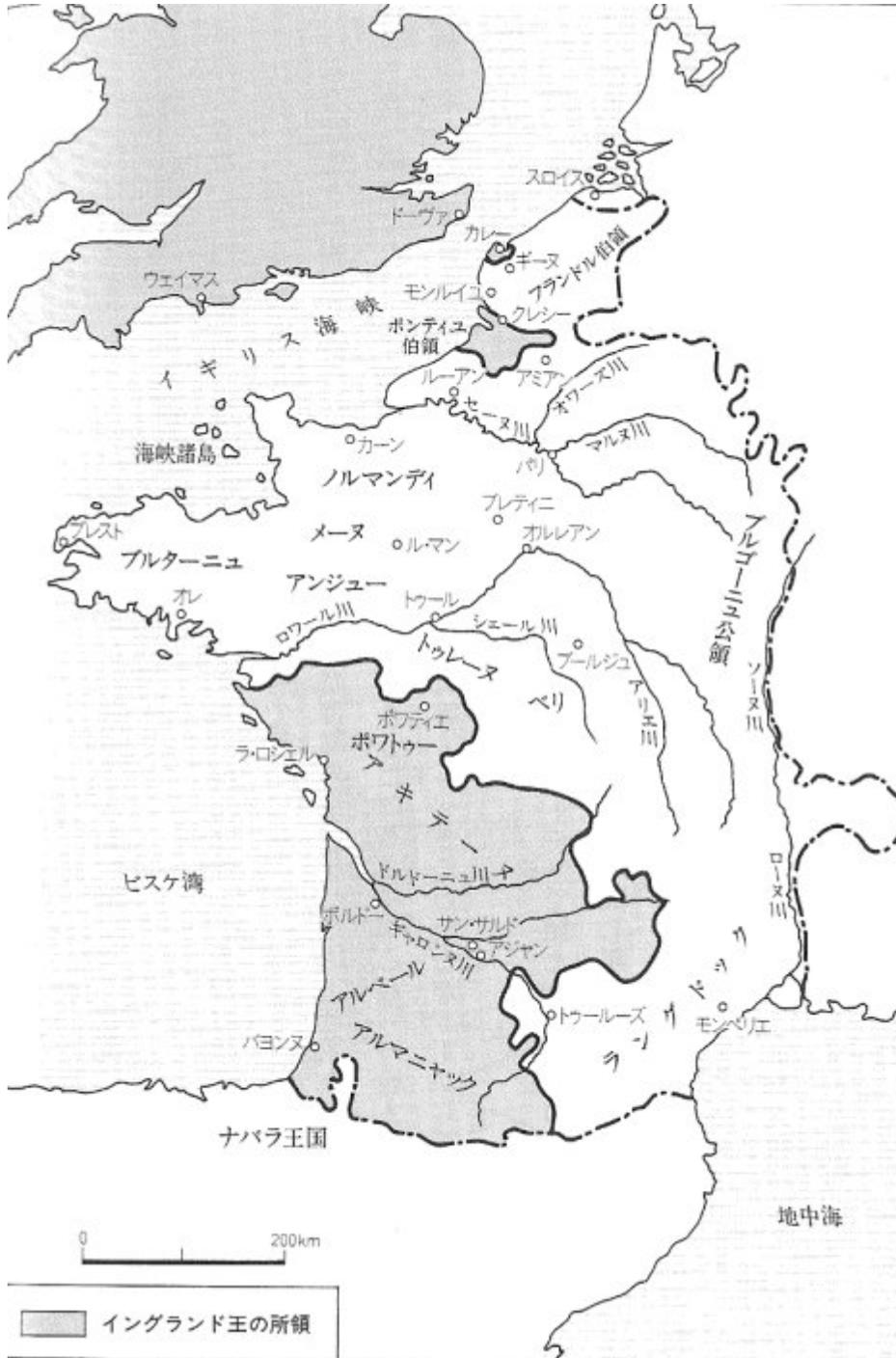


左図
ヴァロワ朝系図
(シャルル7世まで)

2. イギリス王家系図



2. フランス・イギリス周辺図拡大図(決定版)



あとがき

今回の百年戦争をやろうと決めたのは執筆開始の3ヶ月くらい前でした。でもいつのまにか時間がなくなっていつ気がつけば切を過ぎていました(笑)